

西日本新聞 4th .Dec 1967

文化のひろば 芸術のニジの橋を 福岡—サンフランシスコ
ヒッピー文化を爆発 桜井孝身

日本における九州の文化的位置はどんなものであろうか。朝鮮半島、中国大陸に面して歴史的に日本の玄関口が九州であり、博多であった関係から、九州人の気質は素朴ながらも、文化的に高いものとなっている。

明治維新もその性質がどうであれ、九州人が中心的役割を演じていたということは、新しい時代をつくる資質を九州人が備えているという証しであろう。また近代西洋絵画の発展においても先駆者はほとんど九州人で、黒田、藤島、青木、古賀と熱い血脈がつづいている。

こういう風土から”九州派“という前衛美術集団が生まれ、日本の新しい絵画運動の先端に立って十二年になる。パリ、ニューヨークに各三人、サンフランシスコには四人のグループ全員が活躍している。断わっておくが、われわれ九州派勢が外国へ行くのは”勉強“のためではなく、絵を売りにとか、新しい芸術運動展開のためである。

ところで今日、われわれが三年を費やし、今後をかけて懸命に努力しているのは”ニューロマンチズム“の運動である。これは過去の荘風、陰湿な芸術と異なり、太陽にきらめき、いちまつの影もないまったくの幸福 “ジャスト・ハピネス”の追及である。

ご存じのように、サンフランシスコは坂の町、霧の町で、夏冷房がいらず、冬雪が降らず、一年中快適な町だ。日本から直接行くと気づかないが、バリ ニューヨークと回ってサンフランシスコに着くと『日本に帰ったようだね、お寺もあればサシミもある。日本の流行歌が日本語ラジオ放送 “サクラメロディ” から流れてくる』という感想をよく聞くほど。

日本人がそう思うくらいだから、東洋を知らず、東洋に魅せられた外人がサンフランシスコに集まってくるのは当然だろう。その成果としてビートニックたちの詩が起こり、アメリカ文化に衝撃を与え、またトビーなどの太平洋岸派とよばれる画家が生まれ、アメリカ画壇に新風をまき起こした。そうして現在では“ヒッピー文化を爆発させている。

福岡とサンフランシスコはよく似ている。対中国、また対東洋、ともに異質文化の接点にあり、町の規模も人口もほぼ同じ。福岡が大東京におされて、“地方”にかすみがちなの

に。サンフランシスコはあの巨大なニューヨークのビレッジを向こうに回して一步もひけをとらず、文化をリードしているということは“なにを”意味するのであろうか。

私はこう考える。パリはすでに死んだ。すべての文化と権力は新大陸のシンボル・ニューヨークへ移ったかにみえたが、たちまちニューヨークは一つの権威になり下がり、可能性を創造するには動脈硬化して、単なる売買の町になった。それに反しイミテーションとしても西洋が東洋を本気で理解しようとしている所はサンフランシスコである。不幸な関係である朝鮮、ベトナムとの関連もあろうと思われる。

そのサンフランシスコで、われわれはアバンギャルド・ゴーゴー・革命的芸術家—黒白黄色十人によって『ネガチプ』展を開いた。その後、福岡から送られた九州派の作品と数人の会員による九州派展、個展、二人展ハプニングなどを含め五、六回開いた。評価はどうかあれパーティーには百名以上の芸術家が集まり『この活動をさらに推進して、芸術のニジの橋を福岡とサンフランシスコに作ろう』と熱っぽい議論が沸き起こった。

いまオチ。オサムが中心に現地でオーガナイズを勧めているが一続きでパリ、ニュートークへと夢とともに福岡でもサンフランシスコの熱気になんとかして、その美しい芸術のニジの橋をかける夢も実現したいものである。

